【用語】吾妻郡入山村―吾妻郡六合村　花敷・応徳―入山村の字、それぞれ花敷温泉、応徳温泉がある　冥加永―雑税の一種、商工業者への営業税　切替増―年季を延長する際、冥加永を増額すること　永辻―銭で納める年貢の合計　何卒―どうか、どうぞ　是悲―慈悲、あわれみ、情け　岩鼻御役所―岩鼻村にある幕府代官所

【解説】吾妻郡の花敷（はなしき）温泉は、建久三年（一一九二）源頼朝が浅間狩り（三原野狩）の時、西山まで猪を追い込んで花敷まで来た際、湧出している温泉を発見して入浴したのが始まりというが、正確な起源は不明である。宝暦年間の入山古絵図には花敷温泉、また天保十年（一八三九）の入山村絵図では薬師堂が記されている。一方、応徳（おうとく）温泉もその起源を確定することはできない。この文書は、嘉永三年（一八五〇）が花敷・応徳両温泉稼ぎの年季明けに当たるため、今年から安政元年（一八五四）まで五年間の継続稼ぎを許可して欲しい、冥加金も上納する、という入山村役人惣代の弥平次からの願書である。

「晒湯」とあるが、これは土地の女性や子供が、農間期を利用して菅・茅・粟殻などを材料に莚を織ったり、草履や草鞋を作ったりしていたことに由来する。そして、これらの材料を温泉熱で軟らかくし、強度をつよめるための晒す作業（ねど踏み）に利用したからである。そこでこの温泉を「さらし湯」または「ひたし湯」と呼んでいたのである。なお、これに先立つ弘化三年（一八四六）二月、弥平次は個人名で応徳温泉稼ぎ願いを岩鼻陣屋の代官に提出している。